

(2)最近の体育関係雑誌の分析（川口智久報告）
A.『体育の科学』 B.『体育科教育』 C.『健康と体力』 D.『学校体育』の9～11月号の(1)共通の特徴と(2)気になる発言をみておく。

(1)では①激しく揺れ動いたロス五輪問題が論じられていない。わずか数編ある論文でも問題を十分掘り下げたものがない。②臨教審発足という事態の中で全く無関心である。A（9月）大田原論文に一ヶ所ふれられているが、意味不明というありさま。③何故この時期に「楽しい体育」がとりあげられたのか。A、B、D（各10月）各誌とも編集の意図が全く示されていない。

(2)①望月論文（Aの10月）はスポーツのおかれている現状認識に不十分さ、甘さがある。②太田原論文（前出）は体育教師の役割を生徒の管理・秩序維持とし、放課後のクラブをその面から重視する。③佐伯論文（B、10月）は大衆の自発性・自立性を見捨てるものになっている。④池田論文（Aの10月）はアメリカスポーツの活動実態をふまえない単なる数量的把握に終わっている。

（文責 早川武彦）